

銀板から湿板、蛇腹式へ

上野彦馬とその時代

姫野順一

万物を静止画に写す「写真鏡」(暗箱)は、天保14(1843)年に出島から日本に上陸した。ダゲールが1839年8月19日(のち「世界写真の日」)にフランス学士院で写真の発明を発表してから4年後である。

上野彦馬の父、俊之丞は「世界地図計画書」に「ダゲリヨティープ一揃、天保十四卯持渡御差返し、嘉永元年申再持渡、但正図ヲ写シ取候道具」と記録している。銀メッキされた銅板の感光剤を光に感応させるダゲレオタイプ(銀板写真)のカメラであった。

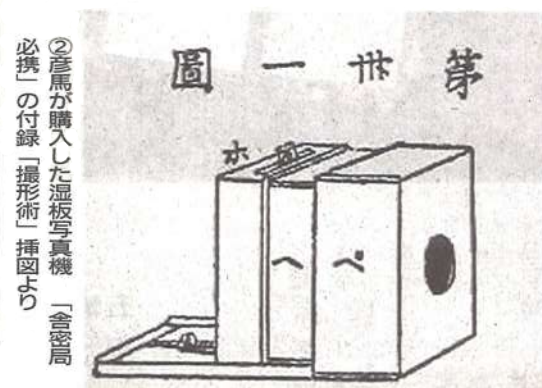
ただ、これは使い方が分からず返品されたが、嘉永元(1848)年に再輸入されたカメラはスケッチされている(写真①)。タテ4・5寸、ヨコ5寸、奥行き9・5寸(約14寸×15寸×29寸)の細長い箱であった。

彦馬が万延元(1860)年に津藩の150両の援助で、出島のオランダ商人アルバート・ボー

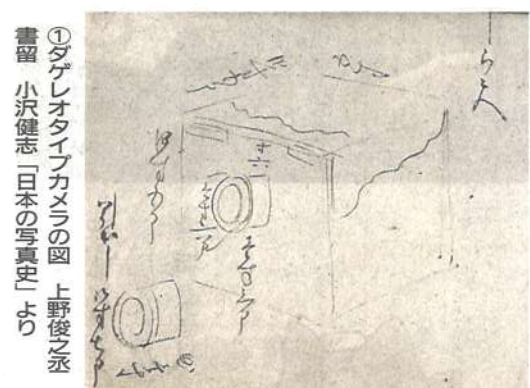


③ベアトのカメラ(林道雄氏蔵)

18 使用した写真機



②彦馬が購入した湿板写真機「舎密局必携」の付録「撮形術」挿図より



①ダゲレオタイプカメラの図 上野俊之丞書留 小沢健志「日本の写真史」より

ドインから買ったのは、フランス製湿板写真機(コロジオンタイプ)であった。イギリス・ダルメイヤー社のレンズが付いていた。写真②は彦馬による「舎密局必携」の付録「撮形術」の挿図である。

撮れる写真は名刺か手札であった。

写真③は、新たに発見されたフエリーチェ・ベアトのものと思われるカメラである。ベアトは彦馬に撮影術を教えたイタリア系イギリ



④彦馬旧蔵のカメラ(林道雄氏蔵)



⑥彦馬が晩年に使った蛇腹カメラ(長崎歴史文化博物館蔵)

ス人写真師。収納箱には「大器械写真箱 明治六年西五月横浜市西洋人ビハト氏ヨリ求」と記されている。

このカメラの撮り枠は▽25・7寸×30・5寸(10寸×12寸、四つ切り)▽20・8寸×25・7寸(8寸×10寸、六つ切り)の2種類。撮り枠に入れるガラスをセットする内枠を変えれば、現在知られているベアトの紙焼き写真は全て撮影可能である。

カメラの蛇腹はキニアタイプ(四角錐)。2分割して折り畳んでも縁が重ならず、コンパクトに収納できて軽量のため、海外や遠隔地での撮影向きである。レンズの座金にダルメイヤーの銘がある。

これらの特徴からカメラ骨董の専門家は、レンズメーカーのダルメイヤーが、木製ボディの製作技術に優れ、キニアタイプを扱っていたオットヴィル社に特注し、自社製のレンズを装着したと推測する。販売された1860〜70年は、ベアトがエジプト、ペルシャ、中国、日本に撮影旅行した時期である。撮影の痕跡は硝酸銀の黒墨で確認できる。撮り枠に二、三の漢数字が刻印されているが、入手した日本人写真師も使ったようである。

彦馬はベアトからこのカメラと撮影した大判写真を見せられ、明

治に入ってから大型カメラを入手し風景写真に開眼した。

写真④は、湿板写真家林道雄氏(静岡県浜松市在住)が長崎の骨董商から入手した木製スライディング・ボックス型カメラである。60年代にイギリスのレンズ会社ロスの販売したジルー・ダゲレオタイプ(箱型)のカメラである。

彦馬の門弟の宮崎長次郎に渡り、響写真館の井手傳次郎から中島写真館を経て、骨董商が約50年前にその子孫から購入したと伝わる。最初のカメラは小さなフランス製カメラであり、永井長義(のちの東大化学教授)の証言から彦馬はカメラを次々に購入していたので、後買いのカメラであろう。前後二つの箱をスライドさせてピントを調節する初期のカメラで、撮り枠は内枠10・5寸×10・5寸の正方形であるから、名刺と手札の大きさの写真が撮れる。

写真⑤は同型カメラによる撮影風景である。やがて蛇腹の組み立て型カメラに移行していく。

写真⑥は、彦馬のキャビネ版12寸×16・5寸のスタジオ用湿板カメラと撮り枠箱である。写真機は、渡瀬定太郎の弟守太郎の息子泰が戦前、長崎県立図書館に寄贈したもの。撮り枠3枚が入った撮り枠箱は、彦馬の妹この・才蔵夫妻の息子上野純一郎の寄贈である。レンズにはフィラデルフィアのセントメイヤーの銘がある。

また、彦馬の写真局は明治28(1895)年に写真機製作所を設けていた。多くの門弟を抱え、工房として写真機材も自作していたのである。

(長崎外国語大特任教授)



⑤幕末写真師の撮影風景(カメラ博物館蔵)

前回(11月17日掲載)の文中、最終段落の「後藤の債務」とあるのは「倒産したクラブ商會と佐賀藩の債務」、「岩崎弥太郎に経営移管されたのは明治24(1891)年」とあるのは「明治14(1881)年」の誤りでした。